

薬服用などで重い皮膚病発症

「SJS」関連遺伝子発見

2015.2.11 (木) 京都

薬の服用などが原因で起こる重い皮膚病のステイブンス・ジョンソン症候群(SJS)の発症に関わる遺伝子を、京都府立医科大や東京大のグループが見つけた。早期診断法や治療法の開発に役立つ成果で、米学会誌でこのほど発表された。

風邪薬の服用がきっかけで発症した日本人、韓国人、インド人の患者計200人の遺伝子を解析。その結果、免疫細胞の成熟に関わる遺伝子IRKZF1で特定のタイプを持つ人は、持たない人に比べて約2.7倍発症しやすいことを突き止めた。

府立医大など 治療法開発に期待

た。

SJSは高熱や全身の発疹を生じ、約半数で視力障害など重い後遺症が生じる。国内では年間約300人が発症している。

府立医大の木下茂教授や上田真由美講師、外園千恵講師らは、

グループはこれまでも、SJSと関連のある遺伝子とそのタイプを見つけている。木下教授は「世界の研究者が協力してコンソーシアムを作り、関連遺伝子を世界規模で調べていきたい」と話している。

(松尾浩道)